ＩＩＡＳ塾ジュニアセミナーテキスト
（VOL. 02007）

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

（思想・文学分野）

宮沢賢治に学ぶ
～八方ふさがりの中で「本当の幸い」を問うこと～

公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2016 年 2 月 23 日開催の第 32 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。
※本テキストは、2017 年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

日本社会の古層から日本的なるものを発掘した人物

宮沢賢治における鉄道

宮沢賢治は、明治 29 年（1896 年）岩手県花巻に生まれた詩人・童話作家として有名です。若干 37 歳で亡くなるまで、文学のみならず農村の指導や青少年の教育など多彩な活躍をしていますが、その作品が有名になるのは死後の事です。文明開化から取り残された東北の地に生まれながら、彼の作品には、化学や地質学や進化論など当時の先進科学やヨーロッパの精神に対する深い理解が見られる一方、賢治自身の日蓮宗への篤い帰依をも示しています。このように、東西の文化、科学と宗教を自在に横断する賢治の精神世界がいかにして成立したのか、当時近代化の象徴と見なされていた鉄道との関連を通して論じてみたいと思います。

田島　正樹（Masaki　TAJIMA）

1950 年大阪市に生まれる。東京大学教養学科フランス科卒業、東京大学大学院博士課程（哲学専攻）修了、元千葉大学文学部教授。哲学者。

著書に、『ニーチェの遠近法』（青弓社 1996）、『哲学史のよみ方』（ちくま新書 1998）、『魂の美と幸い』（春秋社 1998）、『スピノザという暗号』（青弓社 2001）、『読む哲学事典』（講談社現代新書 2006）、『神学・政治論』（勁草書房 2009）、『正義の哲学』（河出書房新社 2011）、『古代ギリシアの精神』（講談社選書メチエ 2013）などがある。

目次

Ⅰ　宮沢賢治の家庭環境と創作活動の基原
（１）古着商、質屋を営む父・政次郎の存在と、父への反発
（２）古着商、父・政次郎のビジネスモデルにおける「鉄道」
　　－ 時間と空間を超える「鉄道」利用が、利益の源泉に－

Ⅱ　宮沢賢治作品における形而上学的「鉄道」の旅
（１）『青森挽歌』に見る「鉄道」の越境性。
　　－ 故・妹トシの存在を探り、オホーツク・樺太へ、青い光を求めての旅。
ア　過去と未来の交錯。「死者」との再会
イ　宇宙全体の生命は、お互いに兄弟。輪廻回帰
ウ　宇宙に散らばる「死者」の残影。存在の不滅

（２）『銀河鉄道の夜』に見る「自己犠牲」の探求。
　　－ 自己犠牲のために生きる、みんなの苦しみを苦しむ人生の探求への旅。
ア　「タイタニック号」沈没
　　－ 他の子供たちを犠牲にしてまで、この子供たちを助けるべきであったか。
イ　「さそり座」の誕生
　　－ 逃げ延びて空しく死するより、他の犠牲となって死すことを選ぶべきであったか。
ウ　カンパネラとジョバンニの誓い
　　－「本当の幸い」を求めて。「正しいこと」を行うことが「本当の幸い」か。

Ⅲ　「本当の幸い（本当の神様)」は、何処に。
（１）「本当の本当の神様」は、たった一人。
（２）信仰の対立は、実験的「真実」によって最終解決されるか。
（３）実人生は、「本当の幸い（本当の神様)」を求める旅。

質疑応答

次代を拓く君たちへ。 ―　田島正樹からのメッセージ　―
答えの不在に耐えること

2016 年 2 月 23 日開催
第 32 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：宮沢賢治における鉄道
講演者：田島　正樹（元千葉大学文学部教授）

Ⅰ　宮沢賢治の家庭環境と創作活動の基原

（1）古着商、質屋を営む父・政次郎の存在と、父への反発

賢治の父・政次郎は大変才覚のある商人で、古着商を営んでいた。古着商で儲けて、金融業に鞍替えをした人物である。その点ではセザンヌのお父さんと似た経歴を持つ。セザンヌのお父さんは帽子商を営み、大儲けをし、銀行を作って大きな資産を残している。セザンヌは、お父さんのお金で、晩年まで自分の孤独な挑戦を続けることができた。セザンヌにとってお父さんの存在は大きかった。宮沢賢治にとっても、父の存在感は非常に大きい。

宮沢賢治
Public domain, via
Wikimedia Commons

父・政次郎は古着商をどのように展開したか。関西に赴いて古着を大量に買い占め、それを持って帰り、故郷岩手県花巻の方で売りに出す。つまり、空間を移動して、関西の方ではすでに流行遅れになり安く売られている着物を仕入れ、花巻の方ではそれがまだ流行の最先端になるというので、それを高く売って商売を行った。その時、鉄道を使った。確か明治 24 年、西暦 1891 年に鉄道・東北本線が開通したその年にすでに関西に仕入れに出ている。それくらい才覚があり、どういうものが商売になるか、それをものにするためどうすべきかに関して嗅覚があった。そして古着商で儲けたお金を元手に質屋を始めた。

東北における質屋というのは、冷害なんかになった時にみんなが頼ってお金を借りるという、貧しい人たちにとっては、言ってみれば、寄生してお金をもうけるということで、賢治から見ると父・政次郎は人の不幸を食い物にしているという風に映った。父・政次郎は特にあこぎな商売をしている方ではなく、むしろ仏教徒として、どちらかといえば温情派の人だった。けれども、賢治から見ると、非常に不道徳な商売を行っているという風に映った。そこで、宮沢賢治は、父・政次郎に大いに反発した。

（2）古着商、父・政次郎のビジネスモデルにおける「鉄道」
－　時間と空間を超える「鉄道」利用が、利益の源泉に　－

「鉄道」は、父・政次郎のビジネスモデルにおいて、重要な役割を果たしていた。「鉄道」は、空間を超えていくという意味があり、空間を超えると同時に時間を超える、つまり流行

の最先端をもって来る。関西の方ではもう流行遅れになっているが、東北では、まだまだ流行の最先端の着物の仕入れは、空間を超えることによって、同時に時間を越境していくことである。そういう力を「鉄道」は持っていた。流行は、段々とゆっくりと伝播して行く、「鉄道」は、それを一気に乗り越え、時間を超えていく。こうして時間と空間を越境するツールとして、「鉄道」は、非常に重要な役割を果たしていた。

岩手県は、原敬[1]の選挙地盤でもあった。原敬は、生涯、鉄道を全国に敷設するのに大きな役割を演じた人物であり、薩長藩閥政府の主流派ではなかった。南部藩は、もともと幕藩体制の側についたからである。その原敬は、大正デモクラシー[2]の中で、非常に大きな花形となって活躍していく。他面、金権政治の汚職の象徴のようにも言われ、毀誉褒貶、相半ばする政治家だった。原敬は、鉄道を敷くことで、日本全国を近代化した人とも言える。ちょうどその頃に、賢治の父・政次郎は活躍した。この父・政次郎は浄土真宗を信奉していた。宮沢賢治はこれに対する反発もあって、日蓮宗に深く惹かれていった。宮沢賢治の日蓮宗に対する関わりは、非常に重要なテーマとなる。

Ⅱ　宮沢賢治作品における形而上学的「鉄道」の旅

（1）『青森挽歌』に見る「鉄道」の越境性。

－　故・妹トシの存在を探り、オホーツク・樺太へ。青い光を求めての旅。

ア　過去と未来の交錯。「死者」との再会

「鉄道」というものが、父・政次郎において果たしていた役割が、賢治の中でどのように姿を変えて現れてくるか。「鉄道」が持っている越境性、時間も空間も越境していくというその性格を、賢治は、幼い頃から実感していたようだ。賢治が生まれたのは、明治 24 年に東北本線が開通して 5 年ぐらい後であり、近代の象徴として、眩いイメージを「鉄道」に対して抱いていたというのは当然に想像できる。

妹　宮沢トシ
『賢治の前を歩んだ妹 宮沢トシの勇進』表紙より（春風社）

最初に「鉄道」が大きなテーマとして現れるのは、『オホーツク挽歌』という一連の詩の中の一つである『青森挽歌』である。挽歌というのは死者を悼む歌で、賢治にとって最愛の妹、トシが東京の日本女子大学で勉学してい

[1] 政治家。岩手の生まれ。外務省退官後、大阪毎日新聞社社長に就任。立憲政友会創立に参画し、逓相・内相を歴任後、総裁に就任。大正 7 年（1918）平民宰相として初の政党内閣を組織し、交通の整備、教育の拡張など積極政策を行った。東京駅頭で刺殺された。
[2] 大正期に興った自由主義・民主主義的な風潮、およびその運動。

る途中、喀血し、肺結核で24歳の若さで亡くなっている。その看病を、賢治は一生懸命行ったが、それも空しく亡くなった。その時の詩は、幾つかトシを悼む詩として有名なものがある。「無言慟哭」だとか、「永訣の朝」だとか、そういう一連の詩である。

トシが亡くなった後、賢治は、トシの存在を探る旅に出る。これを歌ったものが『オホーツク挽歌』。オホーツク海の方から樺太の辺りまで彼はずっと北上する旅に出る。何故トシの存在を探るために旅に出るのかというと、我々にはちょっとピンと来ないかも知れないが、『オホーツク挽歌』の一部に、オホーツク海の水平線を眺めながら、その水平線の青緑の色と、雲と雲の切れ間から覗いてくる「青い色」というものは、これはどちらもトシが持っていた特性だというふうに感じる場面がある。トシはあそこにいるけれども、あそこで何をしているか私には分からない、というふうに『オホーツク挽歌』の中で歌っている。そういうところにトシらしいものを見出そうとして旅行している。本気でそういうことを歌っている。

『青森挽歌』というのは、森の辺りを「鉄道」で旅行している時の心象風景を描いた詩であるが、かなり長くて難しくて意味が通らないようなところもある。詩としての出来は少し怪しいと思うが、多分、これは賢治が皆さんに読んでもらおうと思ったのではなく、自分の覚書のような感じで書いたから、このように難しい詩になっているのではないかと思う。

例えば難しいところとしては、汽車の中で景色を眺めているところで、「私の汽車は北に走っているはずなのに、ここでは南に駈けている」というところがある。これは東北本線が青森に行く手前でちょっと迂回して南に行くところがあり、そのことを言っているという説もあるが、そうではないかもしれない。この旅は、トシの思い出、トシの存在という過去を探る旅だけれど、それを未来に向けての旅先の中で、過去にあったトシの存在と出会うかも知れない、未来に向かって進んでいるけれど、実は未来に過去を見出そうとしている。旅先にトシの思い出を見出そうと、こういうふうに歌っているのではないかと思う。つまり、過去にあったものが未来に現れてくる。亡くなっているはずのトシが未来に存在して、その旅先でトシの面影をいろいろと探る中で、トシの存在と再び出会えるかも知れないと、歌っているのではないかと思う。

そう理解すると、「汽車の逆行は希求の同時な相反性」という表現、「汽車」が逆に行くのは希望し願い求めることの「同時の相反性」であることがぼんやり理解できる。汽車が未来に向かって走っているのに、過去に向かっている（「汽車の逆行」）のは、自分の思いが過去に向かっているのに実は未来にそれを求めている、相反することが同時に行われているという意味ではないかと思う。

その先、ドイツ語表現が現れ、「おお、お前、せわしい道連れよ、どうかここから急いで

去らないでくれ」とあるところに「オー　ヅウ　アイリーガー　ゲゼルレ　アイレドッホ　ニヒト　フォン　デア　ステルレ　O du eiliger Geselle, eile doch nicht von der Stelle」というドイツ語ルビが振ってある。

これは何だろう。賢治を詳しく調べた方がいて、彼が使っていたドイツ語の教科書に次のような副読本があったらしい。どのようなストーリーかというと、流れる川の水に向かって呼び掛けている。「ドゥー」（お前）というドイツ語は、ここでは川の水に呼び掛ける言葉。川の水よ、あなたはそんなに急いで行かないでくれ、と言っている。「eiliger Geselle」というのは男性形なので、トシに向かって言っているわけではない。水が自ら早く通り過ぎていく。その水に向かって「そんなに忙しなく流れて行かないでくれ、ここにもうちょっと留まっていてくれよ」と歌っている。

実はその後があり、その川の水が旅人に答える場面があったらしい。水がどういうふうに答えるかというと、「いやいや、私は海に向かって流れる運命だから、ここに留まる訳にいかない、もしお前が私に会いたいのなら、海に私が流れていった後、やっぱり蒸気になって、水蒸気になって、雲になって、雨になって、山に降り注いで、それでまた、ここへと川が巡ってくるから、その時にまたお会いしましょう」、と水が言う。だからここに留まってお前と一緒にいる訳にはいかないけれども、また会えるということを、このドイツ語の教科書はどうも書いていたらしい。それを彼は覚えていてここに引用している。つまりそういう意味では、トシの存在も、速やかに死に去っていくけれども、また巡り合う時が来る、そういう時を私は必ず待とうと、そういう意味でここに置かれている。それをここだけから推測するというのは非常に難しいが、詳しく調べている人の研究を読むとそういうことらしい。

イ　宇宙全体の生命は、お互いに兄弟。輪廻回帰

「考え出さなければならないことはどうしても考え出さなければならない。トシは皆が『死』と名づけるそのやり方を通って行き、そこから先どこへ行ったか分からない」。ここでトシを探す旅という、この本来のテーマが初めて出てくる。これは、自分が旅行しているのは、トシは死んだけれども、どこかへと行ってしまった、行ってしまったそのトシを探そうとしているけれど、その先どうなっているのかが私には分からない。それを考えなければならない、そういう趣旨である。

「空や愛やりんごや風、すべての勢力の楽しい根源、万象同帰のそのいみじい生物の名を、力いっぱい叫んだ時、あいつはニ遍うなずくように息をした」。これは、トシの臨終の時のことを思い出しているところ。生物学の進化論の学者で、ヘッケル博士[3]という結構有名だ

[3]　（1834.2.16～1919.8.8）ドイツの生物学者であり、哲学者である。ドイツでチャールズ・ダーウィンの進化論を広めるのに貢献した。

った生物学者がいて、すべての生物はある一つの細胞から進化して来た、我々人間も草や木も全部がそこから来たという説を唱えていた。その単細胞の生物の名前を、そのヘッケル博士のことを思い出せという意味で、トシの耳元で叫んだらしい。その時にお前は、私の言うことを分かってくれて頷いたように見えたねと、歌っている。

それがなぜ賢治にとって大事だったかというと、その全ての命というものがこの一つの細胞から生まれて来て、私や貴方も、すべての木もりんごも、そこから来たのだから、その宇宙の全体の生命というのはお互いに兄弟で、「一と全」というものが全部同じだ、「一と全」ということが実は同じだということを、賢治はそのヘッケル博士の学説の中に読み込んでいる。そこで非常に印象付けられ、それをトシと共に語り合ったことがある。何故それが彼にとって重要だったかというと、これは法華経の教義と繋がるらしい。

つまり、仏性というものが全ての中に宿っていて、全ての生物、生命というのは仏の宿り。宇宙のどんな細部にも、全体を映現する仏性が宿る。そういう意味で、どういう生命もすべて一つであるという考え方。仏教なのでそれが輪廻する。我々は、今は人間に生まれているけれど、次の世になると別のものになって次から次へと生命の連環の中に輪廻回帰していく、そういう在り方を我々はしていると。「一と全」というものは一緒であって、食べるものも食べられるものも、これは結局一つの生命だという考え方。

だからむやみに殺生したり、肉食をしたりしてはいけないという考えに繋がり、そういうことをトシと賢治は語り合ったことがある。それを今、思い起こさせるということは、お前はこの瞬間、これから死んでいくけれども、決して無くなりはしない。お前もまた生まれ変わり、生まれ変わりして、再びまみえる時がある。私の前に何等かの形でお前は姿を変えて、きっと現れる、そのことを忘れないでくれと、トシに向かって呼び掛けたと思う。それをトシは、ああ、兄ちゃん、またあのこと言っている、と理解して頷いたように思われたということだと思う。

ウ　宇宙に散らばる「死者」の残影。存在の不滅

「ヘッケル博士、私がその有り難い証明の任に当たってもよろしゅうございます。」これは賢治自身の内声で、賢治自身がヘッケル博士の考えを証明しようと言っているように聞こえるが、ヘッケル博士の学説はヘッケル博士が証明しているはずであり、それを賢治が本当に証明しようとしているかどうか怪しい。

ヘッケル博士の中で一番有名な学説は、「個体発生は系統発生を繰り返す」ということ。個体発生、つまり卵細胞から段々と大きくなって、人体にまでなってくる。初めは魚みたいな格好をしていて、その魚みたいなのがやがて爬虫類みたいな姿になって、それからだんだ

んと哺乳類みたいな形になって、それが赤ちゃんの形になっていく。それは、進化の過程の系統発生、つまり種がどういう形で進化して発生して来たかということを、個体発生の中で繰り返して現わしているという考え。これを初めに唱えたのが、このヘッケル博士らしい。ヘッケル博士の考えは、ある程度は今でも認められているが、ヘッケル博士はそれを基にして荒唐無稽な宇宙論というのか、自然哲学というのか、神秘主義的なことを言ったから、今はその部分はあまり評価されていないらしい。

「個体発生が系統発生を繰り返す」ということは、「一と全」というものがコレスポンドしているということ。「一」であるところの私の発生が、その種という「全」を反映しているということ。それはヘッケル博士が証明したことであり、賢治が証明する必要はない。では、何を賢治は証明しようとしているのかというと、その逆を証明しようとしていると思う。

つまりヘッケル博士が証明したように、「個体発生が系統発生を繰り返す」のだとすれば、「系統発生が個体発生を繰り返す」ということはないのか、ということ。「系統発生が個体発生を繰り返す」というのは変な話だが、我々は個人として生きて、その中には系統発生が反映しているが、その一生涯というのは個人として生き、死んでいく。その個人として生き、死んだことが、今度は、宇宙そのものに散らばっていく、バラバラになっていった時に、宇宙そのものの中にかけらが残る。そのかけらを残して、その意味では宇宙全体の中に私というものが散らばっているとも言える。その散らばった姿をくまなく集めてみると、結局、私あるいはトシの存在がそこに蘇るということはないのかと。

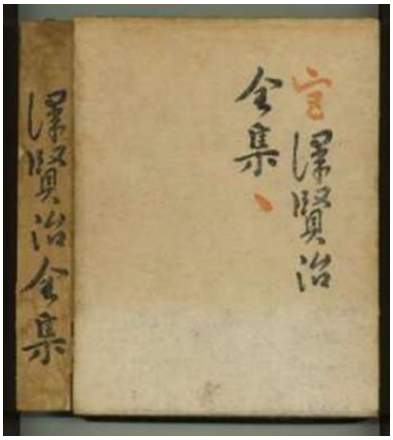
つまり因果と言ってもよく、我々が生きて死んでいく影響というものは宇宙そのものに波及して、いろんなところに我々の残骸みたいなものが残っていく。それを見ていくと、その宇宙の全歴史、つまり系統発生は、結局どのような人が存在したのかということ（個体発生）を反映しているだろうということ。つまりトシの存在というものは、今や宇宙に散らばっていっているけれども、それらを、断片を繋ぎ合わせるようにして見ていくと、そこにトシというものがうっすらと浮かび上がってくるのではないか、ということを考えているのではないかと思う。

いずれにしても、トシの存在はある意味では不滅であるはずだと彼は信じている。死んでしまったのだけれども、それは完全に無くなる訳はない、というふうに非常に深く願望している。そしてそのトシの痕跡のようなものを、空の青さの中に求めようと賢治は希求している。そしてオホーツク海の中にトシが何処かにいないかということを探し続ける、そうやって断片を繋ぎ合わせることによって、トシの存在と再びまみえることができる、そういうことを私はこれで証明するぞ、というふうに宣言している。これが「その有り難い証明の任に当たってもようございます」という意味ではないかと思う。

（2）『銀河鉄道の夜』に見る「自己犠牲」の探求

－　自己犠牲のために生きる、みんなの苦しみを苦しむ人生の探求への旅。

『青森挽歌』に歌われている、トシを再発見するという課題は、賢治の有名な『銀河鉄道の夜』という「鉄道」の物語にどのように結び付いていくか。「鉄道」の旅をしながら、この世とあの世というものの境目を超えていくという意味を『青森挽歌』は持っている。生きている我々の世界と、死んだトシの世界というものを往復する、ちょうど父・政次郎が関西と東北との時間・空間というものを越境したように、賢治にとっては死んだトシと生きている賢治との間のコミュニケーションというものを復元して、あちらへ行ってこちらに帰ってくるような、そういう役割をこの青森鉄道に託して「鉄道」の旅に出ているということが言える。そのトシを求める旅というものが、次には『銀河鉄道の夜』という形で、より超越的な形のテーマに回帰してくる。



『銀河鉄道の夜』が初公開された全集『宮澤賢治全集一』（文圃堂）

この『銀河鉄道の夜』という童話というのは、非常に複雑な童話で、しかもバージョンがいくつもあり、最終バージョンの形が定まったのは 1960 年ぐらいだった。最終稿については「ちくま」の全集がかなり詳しいことを突き止めている。第 1 次稿、第 2 次稿、第 3 次稿とあって、最終稿は、おおざっぱにいえば第 4 バージョンに当たるものである。

そもそも『青森挽歌』に見られるようなトシを求める旅が、賢治にどういう課題を突き付けたかというと、トシが亡くなる時に自分一人を祈ってはいけないということを言ったという。私がもう一回生まれてくる時には、我々のことばかり、私自身のことばかりで悩むような一生ではありたくない、みんなのために、他の人のために悩む一生、他の人のために苦しむような人生に生まれ変わりたいというふうに願ったと言われる。つまりこれがトシの言葉で、それは『青森挽歌』の一番最後、「みんな昔からの兄弟なのだから、決して一人を祈ってはいけない」、これはトシが賢治に言ったこと。トシは自分が苦しんでいるのに、自分の苦しみだけで生きているのではなくて、みんなのための苦しみを苦しむような、そういう人生を今度こそ送りたい、そういう願いというものを賢治に伝えている。

そういうかけがえのないトシの存在というものが、本当はそれだけを思っていてはいけない、トシのことばっかり考えるお兄ちゃんではいけない、トシのことよりもみんなのことを考えてください、一人のことだけのために祈ったのではだめですよと、私の後生、私の幸い、私の死後の幸いだけを祈るというようなことは止めてください、みんなのために祈るようであってくださいよと。死に往くトシがそのように語った。それを、賢治はどうしてもト

シだけが大事だから、トシの存在だけを追求したいけれど、それはトシから禁止されている。それではダメだ、みんなのために生きてください、みんなのために苦しんでください、みんなのために祈ってくださいと、トシは言い残して死んでいる。

だから、その自己犠牲というテーマが後の賢治の童話や詩の中心的なテーマになっていく。自己犠牲というテーマは、賢治自身の初めから持っていた資質の中にもあったが、トシの存在を介して非常に凝縮してくる、結晶してくる。自己犠牲のために生きるということは、もはや賢治にとっては自明のテーゼ。初めはそういうテーゼが、かなり生硬な形で、生(なま)の形で表現されている。『グスコーブドリの伝記』のような童話ではそういう形をとっている。『グスコーブドリの伝記』というのは、村人が冷害で苦しんでいる、それを助けるためにグスコーブドリは自らを犠牲にして火山か何かを爆発させて、そして地球温暖化を狙い、グスコーブドリは死んでいく。自分を犠牲にしてみんなのために。こういう非常に単純な図式で現れている。

しかし、重要なのはそういう自己犠牲を美化するような賢治の態度ではなく、その自己犠牲という、賢治にとって一見自明なテーマというのは決して自明ではなかったし、賢治自身もそれに満足しなかったことだ。つまり、それが自明の価値とは言えないということにだんだん気が付いてくるということだ。それを探究した、あるいは追求した作品がこの『銀河鉄道の夜』だと思う。

『銀河鉄道の夜』というのは、ジョバンニという主人公が、カンパネルラという自分の親友、自分が憧れている親友とともに銀河鉄道という形而上学的な鉄道に乗る。銀河鉄道に乗り、岩手県から旅立って銀河を巡る旅へ出ていく。そこでいろんな経験をする。次から次へいろんな人が乗り合わせてくるが、その鉄道に乗り合わせてくる人はみんな死者。黄泉の国の住人達である。

ア　「タイタニック号」沈没

－　他の子供たちを犠牲にしてまで、この子供たちを助けるべきであったか。

タイタニック号[4]の沈没で亡くなった姉弟というのがいる。その亡くなった幼い姉弟、女の子と男の子を連れた家庭教師が三人で乗り込んでくる。その家庭教師はタイタニック号で沈没する時に、救命ボートは少ないけれども、自分としてはこの子たちだけは助けたいと思って、みんなをかき分けて必死に救命ボートへ乗せようとした。ところがその時、そこに人々が群がっていて、その中には子どもたちもたくさんいて、その子たちを犠牲にして、自

[4] 20 世紀初頭に建造された豪華客船である。処女航海中の 1912 年 4 月 14 日深夜、北大西洋上で氷山に接触、翌日未明にかけて沈没した。

分が面倒をみていた子どもたちだけを助けるということはどうしても出来なかった。それで私は、この子たちのために他の子どもを殺すというようなことがいいのかどうか、それが本当にこの子たちのためになるのかどうかということも考えた上で、その子たちを救命ボートに乗せるのをあきらめた、というようなことを言う。そういう子どもたちと乗ってくる家庭教師の話というのは、いわば自己犠牲の問題、自分が犠牲になってもこの子たちを助けようという気持ちがいいのかどうか、あるいは他の子どもを犠牲にしてもこの子たちを助けるというのは、これはエゴイズムじゃないのかという問題がからまっている。

イ　「さそり座」の誕生

－　逃げ延びて空しく死するより、他の犠牲となって死すことを選ぶべきであったか。

終わり近くに、さそりの話が出てくる。タイタニック号で沈没した子どもたちがサザンクロスの駅、南十字星の駅で降りなければならない。その直前、女の子が語るさそりの話がある。さそりは毒を持っていて、いろんなものに毒を刺して、そうしていろんな動物を殺して生きてきた。しかし、そのさそりが鷹か何かに狙われた時に、ひたすら逃げて井戸に落ちて溺れ死んだ。その溺れ死ぬ時に、自分は他のものを殺して生きてきたのに鷹に狙われて自分は逃げて、それで今、空しく死のうとしている、こんなことだったら自分は食われて死んだ方がよかったのではないかと思う。つまり自分は、今度は鷹であろうが何であろうが、食われて死にたい、自分はみんなの犠牲になって死ぬような人生を送りたいと願った、祈った。それを神様が見ていて、それで「さそり座」という形で永遠にさそりを記念して「さそり座」が輝いているという話をする。この話も自己犠牲がテーマになっている。

ウ　カンパネラとジョバンニの誓い

－　「本当の幸い」を求めて。「正しいこと」を行うことが「本当の幸い」か。

最後にどうなるかというと、カンパネルラとジョバンニは一緒に何処までもこの汽車に乗っていこうねと約束しているのに、カンパネルラだけ降りてしまう。ジョバンニは取り残されて目が覚めるということになっている。目が覚めた時に村人の声が聞こえて、カンパネルラがザネリという女の子が川に落ちたのを救うために、自ら川に飛び込んで犠牲になって死んだということが分かる。つまりカンパネルラは、本当は死者だった。このカンパネルラという子どものしたこと、これが典型的な自己犠牲。

『銀河鉄道の夜』のテーマは、あの世とこの世を往復したりコミュニケーションをとったりするということであり、それを通じて自己犠牲というテーマが一貫して流れているということが分かる。

大事なことは、自己犠牲というテーマが、初め賢治が思っていたほど自明の価値ではないということ。カンパネルラ自身がそういうふうに思うところがある。つまり僕たちはどこまでも「本当の幸い」というのを求めていこう、というふうにカンパネルラとジョバンニは誓

い合う。その時に、カンパネルラは何故「本当の幸い」を求めていこうということを自分のテーマとして思い付くかというと、彼は自分がやったことが本当に正しいことなのかどうか疑問に感じているからである。だから初期の賢治みたいに自己犠牲が絶対に正しいことだというふうに単純には考えていない。

カンパネルラは、僕はお母さんの幸いのためだったら何だってやるというふうに言う。そして、「本当にみんなの幸いのためならば、僕の身体なんか、百ぺん灼いてもかまわない」と同意する。だけど、本当にお母さんの幸いというのは何だろう。正しいことをすることが「本当の幸い」なんだ、とお母さんから聞いたことがある。カンパネルラは、正しいことであればそれが幸いだ、そういうふうに教えられている。だから私は正しいことをやったつもりだから、お母さんも僕がやったことを許してくれるのではないかと言う。こういうところに、この少年の育ちの良さが端的に現れている。

しかし実際、カンパネルラはザネリという他人の子どものために自己犠牲になっていて、これはお母さんから見ればたまったものではない。自分の子どもが他人のために自己犠牲になることは、お母さんにとっては大変悲しいことだ。そのことはカンパネルラ自身がよく分かっている。自分がこういうことをしたためにお母さんが深く悲しむだろうということがカンパネルラに分かるから、自分のことをお母さんは許してくれるかしら、自分がやったことは本当に正しいと言えるかしら、これがお母さんの幸いのためになったかしら、ということを疑問に感じずにはいられない。

そういうふうに感じて、「本当の幸い」とは何だろうという問いが立てられている。「本当の幸い」とは何だろうということは僕には分からない、というふうにカンパネルラは言わざるをえない。だけどジョバンニとカンパネルラは、どこまでも「本当の幸い」とは何だろうかを問い続け、「本当の幸い」を求めていこうねと誓い合う。

Ⅲ　「本当の幸い（本当の神様）」は、何処に。

（1）「本当の本当の神様」は、たった一人。

「本当の幸い」というのは言い換えると、「本当の神様」というふうにも言われてもいる。重大な変更というのは第三バージョンと最終第四バージョンの間に起こっている。それは、「本当の神さま」とは何かという問いと関係する。

銀河鉄道の旅の最後に、タイタニック号の乗客だった兄弟と家庭教師、この三人がサザンクロスの駅で降りなければいけない。それはお母様が待っているところ。お母様はもうずっと以前に亡くなっているのだろう。その亡くなったお母様が待っている、神様のいらっしゃ

る所というのは天国だろう。これは多分、サザンクロスの駅で、その神様の御もとにお母様はもう召されている、そこで私共を待っていてくださっていると家庭教師が言う。だから、せっかく仲良くなったジョバンニたちと別れて、ここで私たちは降りなければいけないと諭す。

ジョバンニは、その兄弟と別れるのが大変ショックで、そんな所にいる神様なんていうものは「本当の神様」じゃないと言う。「僕たちここで天上よりももっといいとこをこさえなきゃいけないと、僕の先生が言ったよ」、つまり天上世界が天国だなんていうのは嘘っぱちで、僕らはこの現世の中に天国をこさえなきゃいけない、と先生が言った。だから、その神様のところへ上って行くなんていうことがいいことであるとは限らない、とジョバンニはジョバンニなりに反論している。

それに対して女の子は「だっておっかさんも行ってらっしゃるし、それに神様がおっしゃるんだわ」と言ったのに、「そんな神様、嘘の神様だい」「あなたの神様は嘘の神様よ」、というふうに、どちらが正しい神様なのかということを巡ってジョバンニと女の子の間で論争になる。それを家庭教師は見ていて、やんわりと「貴方の神様ってどんな神様ですか」と聞く。家庭教師はそんな論争に加わろうとしている訳ではない。ジョバンニは「僕、本当はよく知りません。けれどもそんなんでなしに、本当のたった一人の神様です」と。

その次が面白い。「本当の神様はもちろんたった一人です」。それに対してジョバンニは「ああ、そんなんでなしにたった一人の本当の本当の神様です」というふうに言い募る。ここに信仰の持っている非常に根深い問題がある。他人の信仰と自分の信仰とが違う場合、あるいは少しずれている場合、それでも自分は絶対に正しいんだと言い張りたい気持ち、そういうことが信仰に絶えずつきもの。どちらも「本当の本当のたった一人の神様」を信じているのだけど、少しずれているというような、信仰を巡る深刻な対立がここに顔をのぞかせている。

（2）信仰の対立は、実験的「真実」によって最終解決されるか。

第三バージョンにも、ここの「本当の神様」を巡る対立は描かれているが、その次にブルカニロ博士という方が現れる。その大先生ブルカニロ博士という方が、この信仰を巡る対立を解消するように教え諭すという場面が付いてくる。これが第 3 次遺稿。そこで、ブルカニロ博士がジョバンニに向かって、大所高所の立場から本当の真実について解き明かすという決定的な場面がある。「みんながめいめい自分の神様が『本当の神様』だと言うだろう。けれどもお互い他の神様を信じる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう」。つまり信仰が違っていても、他の信仰を持っている人が彼の神様のためにした立派なことというのは、違う神さまのためであってもやっぱりそれはぐっとくる、深く感動するものがあるだろう、

だからそういう意味で、信仰の対立があってもお互いに理解し合えることだ。

しかしその次に、「それから僕たちの心がいいとか悪いとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしお前が本当に勉強して、実験でちゃんと本当の考えと嘘の考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえ決まれば、もう信仰も科学と同じようになる」という言葉が来る。つまり信仰をめぐる深刻な対立も、結局は解決されるのだよと、大所高所の立場から見るとそれは科学的真理と同じようなもので、何も対立することはない、それをブルカニロ博士という方がジョバンニに対して教え諭す。これで、非常にうまく世界すべてを巨大な一つの真理の中に取り込んで、対立が解消されるというふうに、第 3 次稿まではなっていた。

（3）実人生は、「本当の幸い（本当の神様）」を求める旅

最終バージョンでは、このブルカニロ博士がすべて削られている。つまりそういう形で信仰と科学の間の調和だとか、それから最終的には実験すれば分かるんだとか、本当と嘘というのは区別がちゃんと付くとか、そういう最終解決ということが賢治の最終バージョンではすべて除かれた。つまりある意味では、カンパネルラの心配というものは本当の心配であって、お母さんの「本当の幸い」というのが本当はどちらなのか、自分が自己犠牲になることが正しかったのか、それとも正しくなかったのかということは、そういう客観的な基準によって、例えば実験というようなことによって、解決は付かないという立場に変わっている。

それはジョバンニ、カンパネルラが、子どもたち自身が一人一人自分の決断で考えなければいけない、そういうものだと。ブルカニロ博士が教えてくれるものではない、そういう立場へと変更している。つまり、すべての真理を描いているような教典みたいなものがあって、それに照らしてみれば、これはこうすべきだ、あれはああすべきだということが決まっている、という考えはもはや成り立たない。「本当の幸せ」とは何であるか、むしろそれを考えることこそが我々の義務だった。

つまり「本当の神」とはどういうものなのか、「本当の神」というのは何を望んでいらっしゃるのか、それを問い返す、問い続けるということこそが我々の人生、実人生の意味だ。それは教えられてわかるようなものではなく、自分の実人生を貫いてその「本当の幸い」と「本当の神様」を求め続けなくてはいけない。こういうメッセージに最終バージョンではなっている。これが『銀河鉄道の夜に』現れた賢治における鉄道の旅の最終的な意味だった、ということが言えると思う。

質疑応答

Ｑ１　宮沢賢治の「宗教観」は、どのようなものであったのか。
Ｑ２　宮沢賢治の精神世界は、どのような暮らしの上に築かれたのか。
Ｑ３　宮沢賢治の思想は、どのようにして方向付けられたのか。
Ｑ４　宮沢賢治の目には、父・政次郎の生活はどのように映っていたのか。
Ｑ５　宮沢賢治は、宗教間対立を超えていく道を見出していたのか。
Ｑ６　『銀河鉄道の夜』の最終稿に至る経過は、どのようのものであったのか。

Ｑ１　宮沢賢治の「宗教観」は、どのようなものであったのか。

宮沢賢治は宗教と科学と芸術を一応、融合したと思う。その宗教に関して、先生にご説明いただいたようにたった一人の神、本当の神というと唯一絶神ということになると思う。宮沢賢治は法華経、日蓮宗の信者だと言われているが、銀河鉄道の夜には法華経の考え方以外にも浄土教的な彼岸であるといった様々な要素が出てくるが、賢治の宗教に対する修練度というか理解は少し甘いのではないかとも感じる。そういった、賢治の宗教観についてご教示いただきたい。

（田島）

確かに難しい問題で、賢治の宗教観というのは非常に難しくて深いと私は思っている。それはどういうところに現れているかというと、例えば『ビジテリアン大祭』という童話がある。ベジタリアンの国際大会がカナダのあるところで行われたというフィクションになっている。主人公も日本代表として、ベジタリアンとしてそこに参加し、その見聞記みたいな格好をしているという内容の童話。ベジタリアンがそれぞれ各国を代表して、いろんな演説をするのだけれど、ベジタリアンだけではなく非ベジタリアン、肉食派というのも畜産業界から招かれてそこに座っている。畜産業界から肉食がいかに正しいか、正当化できるかという、そういう話をする。

童話の構成は複雑で、ある時、交互に話が進んで、アメリカの仏教徒と称する人が肉食を肯定する立場から演説をするというのがあり、その話を聞いて主人公がいてもたってもいられなくて、それに反論するという場面が出てくる。自分は演説する予定もないのに、なぜ居ても立ってもいられなくて反論せざるをえなかったかと言うと、アメリカの仏教徒が、キリスト教徒と仏教徒を比較してみると、仏教の方が数倍ずっとすぐれた宗教だということが私は分かったと、だから私は仏教徒になったと話す。そういう話をして、その立場から肉食というものがいかに正当化できるかという論を展開する。それに対してなぜ仏教徒の私が反論しなきゃいけない気持ちになるかというところが複雑。つまり仏教徒の立場ならば仏教の方が、キリスト教よりも優れていると言われても別に反論する必要はない、そんなに優れているかなあ、まあまあそれ程でも、などといって謙遜するならともかく、主人公は非

常に激昂する。主人公は温厚な人なのに、仏教の方がキリスト教より優れているというその話を聞いた途端に、もう立ち上がらずにはいられないほど激しく怒る。

彼は、キリスト教と仏教となんとか教と並べて、どれが最もいいかというような立場をとるということが、そもそも全く何も分かっていないということだと考えている。仏教というのは仏との出会いというものが因縁になってたまたま仏を信じる、仏教徒になるという道になっていて、自分としては、たまたま前に開けた道を深め踏みしめていくだけ。

その出会いを深めていくことによってキリスト教徒になったり、仏教徒になるということがあるのであって、その出会いと関係なしに、知識として、どちらの教義の方が合理的であるかとか、どちらの方が優れているかとか、比較すべきものじゃない。そもそもそれを比較検討できるような確固たる視座に自分が立てるのか。そのような立場が揺らいだ所で、神や仏と出会うのではないか。私が仏を選ぶのではなく、仏が私を選ぶことによって、手を差し伸べてもらうことによって、私が仏教徒になったり、キリスト教徒になったりするのではないか。そういう仏とか神との出会いということを忘れて、教義としてどっちが優れているか判断するような賢しらな態度そのものが、そもそも信仰という態度からほど遠い。だから単に仏教が優れているとか、キリスト教が優れているというような言説は、土台からナンセンスだと賢治は考えている。

そうした仏教の信仰と密接に結び付いた形で、その菜食主義というのがある。この菜食主義ということをそもそも考えてみると、なぜ肉食はだめで、菜食がいいかという究極的な正当化の根拠はない。どちらも命をいただくわけで、米を食ったからといって、それは次の種になるべきものを種にもせずに、自分の命にして利用するだけ。だからそれは命を奪ってはいない、殺してはいないけれども、同じように命をいただいているということだから、程度の差に過ぎない。菜食主義を徹底して考えれば、程度の差しかないということに気が付く。

つまり菜食主義というのは究極的には不可能であり、それを貫徹することは絶対にできない。本当にピューリタン みたいに自分だけが清く正しく生きることは不可能だという、そういう自覚に到るのが本当の菜食主義ということになる。賢治は信仰をそういうものととらえていたと思う。つまりこれを信じれば、仏教徒として、キリスト教徒として完璧だとか、そういうようなことではなく、ある種の永遠の問いというものを問い続けることにおいて仏教徒であったり、キリスト教徒であったりするようなものだと、そういう考えが彼の宗教観の中にある。

教義として、こういうところとこういうところと・・という具合に、いくつかの信仰箇条を並び挙げて、仏教のこれとこれとこれを自分は信じていると、そういうような形で捉えられるようなものではない。それも先人たちがそれを尊重してきた限りにおいては、尊重すべきものではあるが、それは絶対視すべきものではない。

仏との私の出会いというものが大事で、その仏との出会いをいわば差配するというか、それを円滑にするための方便みたいなものとして、教義があるにすぎない。だから私が仏とどう出合ったかということを抜きにして、法華経がどうのとか、真宗がどうのとか言えるもの

では必ずしもないと思う。

たぶん宮沢賢治の法華経との出会い、宮沢賢治の仏との出会い、そういうものがあって、それはもちろん詳しくは分からないけれども、そういうものを熟成し展開したものとして、彼の『銀河鉄道の夜』であったり、『よだかの星』であったり、『ビジテリアン大祭』だったりといった彼の著作を我々が読むことができる、というふうに考えた方がいいと思う。

つまり、あくまでもそれは謎であり、問いであり、問いかけを我々に与えてくれているものであり、我々はそれに対して問いをもって答えていく、自分自身が問いかけを持ってそれに答えていくことができるような、そういうものであり、結論があるものではないと思う。

Ｑ２　宮沢賢治の精神世界は、どのような暮らしの上に築かれたのか。

賢治は「若干 37 歳で亡くなるまで、文学のみならず農村の指導や青少年の教育など多才な活躍」と紹介されている。わずか 37 歳で、農村の指導や青少年の教育のみならず、ここまで文学をやって、80 年ほども、これほど影響力を発揮できたというのはすごい。彼はここまでの精神世界を築くに当たって、どんな生き方をしてきたのか。例えば食べ物を食べて、どんな勉強をして、どんな交流があったのか。農村の指導をやって青少年の指導をしながら、文学作品を書いたのか。彼が普段どんな暮らしをしていたのか、ご教示いただきたい。

（田島）

実際、どの程度実効的な農村の教育をやったのか、やったとしてもどの程度成功していたかというと怪しい。というのは賢治の生涯というのは、一面では、きわめて多産的で多方面に活躍したように見えるけれども、他面では、挫折の連続といってもいいようなもので、賢治は結局何をしても中途半端な人間だったとも言える。親父から見ると、まともな職にもつけないで、空理空論みたいなことを言っていると。そんなものじゃだめだろと、そんなもので世の中を救ったり、人を救ったり、出来る訳がないじゃないかと、そういう目で見られていた。同時代の人にはほとんど認められなかった。

中学校なんかの友達は比較的エリートコースに行っているが、賢治は病気ということもあって、自分はそういうコースは全うできなかった。まともな職にもつけなかった。父・政次郎の職を継いで質屋をやればよかったけれど、それはいやだと言う。その頃、賢治は何を目指していたかと言うと、化学の知識を使って人造宝石を作ろうとしている。彼が当時身に着けていた化学で人造宝石が出来るかといえば、無理だったろう。酸化アルミとかさまざまの結晶を作るための高温高圧の技術もなかった。そういう、本当に実現性もなく、実業化もできない夢みたいなことを考えている。けれど、面白いのは、そういう若い頃から人造宝石を目指していたのが、ある意味では実現したということ。賢治の詩作品が宝石で結晶だと言える限りにおいては、賢治が人造のそういう結晶を作り出した、人造宝石を造ろうとした志は、ある意味では半ば実現した。

しかし、いわゆる普通の意味では何事もものにはならなかった人間だと言ってもいい。次々にいろんなことに挑戦するが、結局は何事も実らない人間というのは、我々の世の中に

いたるところにいるものだ。結局は決まった仕事も続かず、みんなから軽蔑されて、あいつはものにならなかったね、みたいに言われながら死んでいく、そういう人。そういう人が偶々、遺作としていろんなものを書き残していたから、しかもそれをちゃんと大事にした弟なんかがいた。そういう人たちに支えられて日の目を見たというだけの話。だから案外と我々の周りにも、そういう隠れた、日の目を見なかった宮沢賢治がいるのではないかという気がする。

Ｑ３　宮沢賢治の思想は、どのようにして方向付けられたのか。

賢治が最終的に得たところというのが、宗教にせよ、道徳的な判断にせよ、それが完璧なものじゃない、ということを認識し続ける、あるいは自己の信仰の不完全さというのを認識し続けることと、それが重要だというところに賢治が最終的に辿り着いた旨の説明がされた。そうやって考え続ける際、その考える足場として、宗教とか化学とか地質学とか様々なものがあるとして、その様々な知識を、好きなように使えばいいという訳ではないですよね。それをどういうふうに、方向付けたのか、彼の持っていた広い視野の知識をどういうふうに方向付けていたのかということが知りたい。

（田島）

難しい質問である。どういうふうに方向付けていたのかと言われると、それはもちろん賢治なりにはあったと思う。一番大事なのは、信仰とか、日蓮宗とかであって、それから地元の人たちの幸せ、少なくとも不幸を軽減することというのは、非常に大事だと感じていたことは明らかである。

しかし、それは他の人もそういうことは考えている人はたくさんいるので、それが取り分け賢治らしいことでも何でもない。明治の終わりから大正、昭和にかけての人たちは、農村の悲惨な状況というのはみんな知っている。それを何とかしなければいけないということは、みんなが考えて、みんなが必死に努力した、そういう時代だったと思う。

賢治は化学だとか、近代科学だとか、宗教だとか、そういうものを全部ミックスした文学世界を作り上げた非常に稀有な天才的な人物ではあるけれど、それは結果としてそう言える訳で、賢治自身が確信をもって進んでいたとか、絶対ここに行けば正しい道だという方法論といったものを手にしていた訳はない。むしろそういうものはない段階で、自分には何も実らないなという予感を持っている。自分は何も実現しないまま、何もひとかどの仕事をしないまま朽ち果てるという、非常に激しい、悔いのような感情。そういう中で呻きつつ求め続けた。呻きつつ求める人（ceux qui cherchent en gémissant）というのが賢治ほどぴったりくる人はいない。呻きつつ求めることの中に、結果的に仏の救いがあったということではないか。だから我々はそれしか言えない。こちらがだいたい正しいよ、こちらの方がうまくいくよ、というようなことがあれば、それは非常に楽なこと。真っ暗闇の中を歩き続ける時には、やっぱり呻きつつ求めるしかないと思う。そういう、希望というもののない路。どの道に進もうとも、どの方角を見ても、希望があればそっちに進めばいいだけ。そういうもの

がないところに、なお何かを呻きつつ求めるということがあるだけだと思う。

Ｑ４　宮沢賢治の目には、父・政次郎の生活はどのように映っていたのか。

花巻の山の方からずっと町の方に下りて来ると、途中に小学校があって、確か、「風の又三郎」がいたのではないかというような所があって、ずっと下がってイギリス海岸とかがある。そういう土地の感覚というか、当時の東北の農家の暮らしの厳しさの影響はすごくあったのではないかと思う。そういう中で、彼自身、この地で本当の意味で希望を失ったのではないかと思っている、それでも何かを求めていくということになったのかなと思う。父・政次郎が花巻から大阪まで古着を買いに来ていたという話に関して、何日ぐらいどういう経路で大阪まで鉄道を使って行ったのか。

（田島）

東北本線ができたばかりで、それから東海道線ができた。だから、それを乗り継いで行ったと思う。昔の鉄道というのは、初めは私鉄だったのが、どこかの段階でそれを全部国有化して、軍事上の理由から国有鉄道に統合するというふうなことがあったと聞いている。その時に軽便鉄道というのがあって、私鉄の段階で軽便鉄道として作られて、それがいずれかの段階で国有鉄道になって、国鉄として東北本線になったと思う。父・政次郎がどのくらいまでそれを、国有鉄道の時代を経験しているのかどうかというのはちょっと分からない。父・政次郎が鉄道を使ってどうのこうの、という観点は私が見付けたことではなく、友人の批評家の千葉一幹氏が評伝『宮沢賢治』（ミネルヴァ書房）で書いていることである。それを読み、ああそういうことがあったのかと思って、私が形而上学的な「鉄道」と、形而下学的な「鉄道」という形で、そこに共通するようなものがあるのかというふうに思った次第である。

Ｑ５　宮沢賢治は、宗教間対立を超えていく道を見出していたのか。

トシさんは日本女子大とおっしゃいましたか？今、朝ドラでやっているのがちょうど日本女子大の創設者の話、アサさん。同志社女子大の先生から聞いたところ、アサさんもキリスト教に最終的には改宗したと。儒教的な世界観の中で育って、女子教育というものに対して自分の家族も理解がなかったし、自分が学校を開こうとしても大変だった。その時にひとつ支えになったというのが、人間の世界の差別というものを乗り超えるには、絶対者である神の前の平等という考えがあったと。

ユダヤ教の神様、それからキリスト教の神様、それからイスラム教の神様、それぞれ聖地がみんな重なるように、それぞれが指している指は異なるにしても、月は一つであるように、指している神は同じものを言っていたはず。にも関わらず、この三者の間で多大な争いが古今東西続いてきて、中々対話すらないということは一体何なんだと思う。絶対神を外に求めるのではなくて、それぞれの生命の中にあるというふうに考える方向というのが法華経の考え方と理解している。たぶん賢治もそこに魅力を感じつつも『銀河鉄道の夜』の第四次稿では結局それを放棄してしまって、呻きつつ生きるというか、考える、祈るということでし

かないというところに留まったというか、突き抜けてそこに行ったのかもしれない。その辺はどういうことだったのかなと思う。

（田島）

非常に難しい問題で、賢治自身がどういうところに到達したかということは、テキストとともに論じるべきことだと思うが、私自身がどういう信仰観を持つかということに引き付けて考えてみる。仏教の万事の中に仏性を見るような世界の見方というものは、賢治の中にもちろんあり、『青森挽歌』の中ではモナドという言葉が出てくる。モナド という見方は、すべての仏性、すべての事象がモナドだという訳。モナドである限りにおいては、宇宙の生きた鏡だという訳。どのような、ミミズの生命であっても、その中には全宇宙が映し出されているというそういう見方。そういう見方で世界を見るというのが仏教の華厳経だとかの基本的な見方だと言えると思う。

私はそういう世界観に非常に惹かれていた時期があるが、今はどちらかというとキリスト教の立場に若干余計にひかれている。というのは、宇宙というのがそれほど完璧なものであるはずはない、と私は考えるようになったからだ。ライプニッツや仏教の華厳経の見方は、宇宙を完全なものと考える点で、過度に「審美的」な見方であると感じる。

我々がそれに似た経験をすることは、確かに時々あるかもしれない。つまり物の中に世界が映し出されているということ、あたかも写し出されているかのように経験する。モナドであるかのような経験をするけれども、しかしモナドほど完璧には映し出されてはいないと思う。というのは、映し出すべきものは何かといったら、そんなモナドではなくて、たかだかテキストだから。つまりテキストの中に、我々は世界が映し出されているかのように感じる瞬間がある。

私はよく、親鸞 のことを書き残しいている『歎異抄』 の話を思い浮かべる。『歎異抄』の中で、仏の本願というのはよくよく考えてみると、「ひとえに親鸞一人のため」だ、自分のためにこそ仏の本願があったということに私はようやく気が付いた、という一節がある。それをどのように理解したらよいか。

親鸞は比叡山の中に籠って仏典のテキストを読み続けていた。読み続けても、読み続けても、悟りが得られないという苦しみの中にいた。ところがある時に万巻の書物を読んでいる中で、何か書物を読んでいる青年僧の姿が書かれている。その青年僧というのが何とか山に籠って本を読み続けているけれども、その中に救いが読み取れないということで、延々と悩んでいる、そういう青年僧がいる、そういうテキストに出会う。そうすると、親鸞は「その青年僧は私だ」と気が付く。私のことを、仏が何千年も前から予見していて、私が数千年後に現れて、比叡山という山に登って来て、そこでこの本を読むように仏が采配をしてくれている。つまり、そういうように中国に伝播して、それが中国語に翻訳されて、それが日本に持ち込まれて、比叡山の中の図書館に置かれるように仏が采配してくれていると。私が来るのを何千年も前から仏は待っていた、ということに気が付いた時に、親鸞の信仰が確立する。親鸞がほんとの親鸞になったのはその瞬間であって、テキストの中に自分自身の姿を見出

した時だと言えると思う。

テキストの中に自分自身の姿を見るというのは、ある意味では比喩であって、親鸞の細部についても全て書かれていた訳はない。あたかもテキストに私の世界そのものが映し出されているかのようにそのテキストを理解する、私がそれを読むということがあるだけだ。そういう意味で言えば、宗教的経験というのは文学の経験に似ている。小説で読んで、ひとの話だと思っていても、「この主人公は自分だ」と思える瞬間がある。そのように、その主人公の中に私自身を見出すというようなことが、ごく普通に文学経験の中にある。そういう経験が宗教経験の基礎にあるとすれば、それは自分自身、その生き続けている姿の細部までがその中に映し出されているわけではなくて、あたかもそのようなものとして、テキストの中に自分の物語であるかのようなものを読み取るということである。

例えば、『ドン・キホーテ』を読んでこれは私だと思う人もいてもいいし、『ハムレット』を読んで、ハムレットこそ私だと思う人がいてもいいという形で、そこに、私がどのような信仰を読み取るかという、その自由度があるということになる。その人の生きてきた来歴の中に準備されていた信仰がある。そのような自分の来歴があり、仏典の青年を親鸞が自分だと思うことができ、我々が、自分はドン・キホーテだというふうに考える自由度がある。

このように自由度があるというのは、世界がそんなに完璧には映し出されていないということ。世界のどの部分も世界の全体を映し出しているわけではない。世界がそんなに完璧なまでに出来上がっていないというのはすごく大事。もし世界が完璧であれば、信仰を持つ必要はない。神の世界創造が完璧なものに出来上がっていたとすれば、それを鑑賞する以外、我々のなすべきことは何ひとつないだろう。だけど世界を神が創ったとしても、それはそんなに完璧なものに出来上がっていない。今しも何処かでぼろぼろになっている。だからこそ、神が我々に呼びかけているともいえる。世界はこういうふうに私は創ったけれど、どうも出来損ないになってしまった。君どうにかしてくれ、とこういうふうに神が世界を通じて私に呼びかけている。

これがヨブの立場だと私は思っている。ヨブは友達からお前の苦しみの原因はお前自身にある、お前が罪を犯したからだと言われた。それに対して、ヨブは身に覚えがないと言って抗弁する話がある。このヨブの話で、最後に神が現れて、どうして私はこんな目に遭っているのですかとヨブが神に聞いた時に、神はどういうふうにお答えになったかと言うと、それは私が問いかけるべきことで、あなたが聞くべきことではない、というふうに答えた。ヨブが何故こんなひどい目にあうようにしたのですか、何故こんなふうに私が苦悩を背負うように貴方は御創りになったのですか、世界を創造したのは貴方だから、私がひどい目に遭うのはどういう理由があるのか貴方は知っているはずでしょう、だからその苦悩の意味を教えてください、と神に問いかけた。ところが神は、お前がここにいるのはどうしてだとおまえは思うのか、お前自身が答えるのだと言われた。

つまり神としては、自分の世界の崩壊を目の前にして、もうどうしようもないという状況で窮地に立っていて、ほとほと困窮してしまっている。ヨブの苦しみというのは、結局神の

ヨブへの呼び掛けである。どうしたらよいのかということは、神にも分からない。神はだから全知でも全能でもなくて、ヨブに頼るしかない。そのような完全ではない世界であるからこそ、神が我々に呼び掛けて、我々が神を助けるために立ち上がらなければいけない、そういうことこそが『ヨブ記』の全体の結論だと私は考えている。これは、モナド論や華厳経が「審美的」であるのに対して、優れて「倫理的」というべき立場である。

Ｑ６　『銀河鉄道の夜』の最終稿に至る経過は、どのようのものであったのか。

ブルカニロ博士の部分を第四次稿から削除して、最終稿ではもう少し理性の上の世界の方に飛び出たという、その契機というか、きっかけについてお話になりましたでしょうか。

（田島）

それは私には分かりません。何度も書き換えているということは明らかだが、どういうことで書き換えたのかということは分からない。何時頃書き換えたのかというのは漠然とは分かっているが、どれが初めの原稿で、それに何処を消しているかといか、そういうのは原稿を詳しく研究しないと分からない。最近は研究が進んでいるが、何の理由でここを消したのかとか、それは分からない。我々が想像するしかない。

答えの不在に耐えること

快刀乱麻に答えを出す知性や理論には特有の魅力があるかもしれませんが、より重要なのは問題を見つけることです。問題は、初めそれがいったい何なのか自体があいまいで、無視したくなるかもしれません。しかし、「何か変だ」という腑に落ちない感覚を大事にして、ごまかさないことが必要なのです。せっかちな決めつけや割り切りは禁物です。このことが存外難しい。だから私は言いたい。自分の中のいまだ明瞭でない謎めいたものに耳を澄まし、それに耐え抜くこと、卵を抱く親鳥のように、いまだ名もないその存在に畏怖しつつ、長い月日を耐え抜くことが必要だと。

2016 年 12 月 1 日制作

編集・制作　公益財団法人国際高等研究所
ＩＩＡＳ塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監　　修　池内　了　猪木武徳　佐伯啓思　高橋義人

ISSN 2759-0585

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）